

児童事例 1 就学に伴うライフステージの変化をふまえた障害児の相談事例**事例概要**

一郎君（仮名）は満5歳（年長児年齢）。2歳時に知的障害及び自閉症との診断あり。現在は障害児に配慮のある幼稚園に通園しながら、幼稚園の休日に地域の児童発達支援事業所を利用している。4月から地域の小学校（特別支援学級）に就学する予定。

年齢の割には大柄な体格で、色白で朗らかな印象の男児。家族や見知った相手には親和的だが、それ以外の人に対してはあまり関心を示さない。身の回りのことは概ね自分で取り組めるが点検や介助が必要。日常生活に関する事柄であれば、単語やサインで意思疎通可能だが、語彙や語数に幼さがあり理解して対応してあげる必要がある。朗らかで活発なタイプだが、少々落ち着きにかけがちで、思い通りにならないとイライラしがち。集団場面や環境変化が苦手なところがある。

家族構成：

父、母、本児、弟、父方祖母の5人家族。父親は会社員で週末が休み。育児には協力的で休日には本児の世話をよくしている。母親は落ち着いた性格で、育児と家事に専念していて、本児の育児のために積極的に相談したり勉強したりしている。弟は2年下の4歳で、4月より幼稚園に就園する予定。弟は勝ち気な性格のようで、最近兄弟喧嘩が増えてきて両親は頭を悩ませている。同居している父方祖母が母親の育児や家事を積極的に手伝っているが、（健康ではあるが）高齢であることから体力的に限界がきているとのこと。嫁姑関係は良好で、母親も祖母を信頼している様子が窺われる。

発育歴：

満期正常分娩。乳児期から、母親は何となく他の子との違いが気になっていたが、健診では特に指摘されなかった。1歳半健診の際、〇〇市療育センターへの相談を勧められ、2歳前頃から定期的に同センターの親子教室へ通うようになった。3歳時に3年保育をしているY幼稚園に入園したが、なかなか馴染めずに1年間で退園。4歳からは、障害児に配慮のあるZ幼稚園にあらためて入園した。年中組は少人数の個別的配慮のあるクラスだったが、年長組になると普通児との交流形式の園生活を送っていた。また、現在の幼稚園入園と合わせて、地域の児童発達支援事業所「すくすくルーム」を利用し始めて、幼稚園休園日の日中活動や余暇活動の提供をして貰っている。定時服薬有り（安定剤及び睡眠導入剤を服用中）。

相談の経緯：

4月からは地域の小学校に入学するが、就学後の学校生活や日常生活に様々な不安があるとのこと。また、今までセルフプランで支援サービスを利用してきたが、就学を機会に相談支援専門員に相談をしながら、今後の生活や福祉支援の利用を考えたいとのことで、〇〇市療育センターから紹介されて来所した。

ポイント

- どのような発達特性や障害があっても、その子らしく健やかに育ち、豊かに暮らしていくための支援を考えること。
- 児童と保護者（家族）が必要な支援を受けながら、地域の中で普通に日常生活を継続出来るための支援を考えること。
- 児童と保護者（家族）には各々に固有の課題やニーズがあり、それらに対する個別的な理解とともに、一体的で包括的な支援の提供を検討すること。
- 障害児支援施策は専門的な支援であることをふまえ、児童一般施策等との適切な連携に対する十分な配慮を行うこと。
- 児童の発達是多様で複雑であることをふまえ、様々な関係機関等との協働とチームアプローチを心掛けること。